実際に生徒と関わり、どのような支援が適切かを考える時間がとても楽しく、今後のための学びになった。チャレンジタイムや授業、休み時間、給食などいろいろな場面によって、生徒の個性が表れるのがとても新鮮だった。大学の授業で障害の特徴や様々な支援の方法を学んできたが、実際には子供たちそれぞれの特徴があり、子供を目の前にして考える支援が有効であると学ぶことができた。

公開授業では T2 として特別支援学校ならではの授業展開を経験することができた。分かりやすく教えるのはもちろん、授業の雰囲気を作ることや、子供たちが集中できるような支援を考えるのが難しいと感じた。この教育実習で学んだことを、今後の大学での勉強や実際に現場に出たときに生かしていきたい。

今回の教育実習を通して、授業を行う際に子供が意欲的に取り組めるような活動や教材をつくっていくことの大切さを学ぶことができました。プリントにイラストを多く加えたり、活動の内容に子供たちが好きなものを取り入れたりしてみると、子供が積極的に授業に参加し学習を楽しむ様子が見られて嬉しかったです。日頃から子供たちとたくさんコミュニケーションをとり、好きなものや興味のある事柄を知っておくことは、いろいろな場面で大切になってくるのだと分かりました。また、ただ楽しいだけの授業ではなく、その単元のねらいから外れることのないような授業づくりの難しさも実感することができました。

私は教育実習を通して、子供たちに気付きを促す言葉掛けをすることの大切さを学びました。実習が始まったばかりの頃は、やるべきことを全て伝えたり、自分の方から示したりしてしまっていました。しかし、先生方の様子や子供たちとの関わりから、子供が自ら気付き、考えて行動できるように促すことで、子供の自立につながっていくのだと学びました。特別支援学校では、子供たちの将来のことを見据え、一人一人の自立につながる支援をしていくことが大切だと思いました。

特別支援学校での教育実習を通して、生徒の実態を日々の生活での関わりの中で深く把握することが重要なことであると学びました。毎日生徒と会話をし、授業や休み時間での様子を観察することで、生徒の個性やニーズを細かく理解することができました。このようにして捉えた生徒の実態をもとに、それぞれへの支援について試行錯誤を繰り返し、より良い支援方法を模索しました。生徒たちの多様性に対応するためには、柔軟性や他の教員との連携が不可欠であり、教育実習を通して、これらの実践力を育むことができたと感じました。

今回の教育実習では、児童一人一人との適切な関わり方を学ぶことができました。それぞれの活動のペースや集中力だけでなく、そのときの児童の気持ちも考えて、言葉掛けの仕方や距離感を変えて支援することが大切だと感じました。最初は児童が受け入れやすいように伝えられなかったことが、伝わるようになってきたときは、児童との信頼関係が少しずつ築けてきたように感じてうれしかったです。

教育実習を通して、多様な視点から児童を捉えることの大切さを改めて学びました。私と休み時間に遊んだ児童が、授業中にも遊びの続きをしてしまうことがありました。どのような対応をするべきだったか悩んでいると、先生方から「この子にはこういう対応をしてみてもいいかもしれないよ。」と新しい視点からアドバイスをいただき、アドバイスを実践してみようと前向きになれました。様々な視点の引き出しを増やし、3週間で意識や考え方が大きく変化し、成長することができたと感じています。

教育実習は大変なこともありましたが、うれしかったこともたくさんありました。朝のチャレンジタイムから、保護者または放課後等デイサービスの方に引き渡すまで、常に児童の様子にアンテナを張り続けるのは慣れないことで、とても難しかったです。一方で、ずっと見ているからこそ、また教員間での細やかな連携があるからこそ、児童理解も深まりました。3週間という期間の中で、少しずつ児童との信頼関係ができてくる実感があり、楽しくやりがいをもって実習に参加することができました。